

高校社会科・倫理の学習指導の実践

(第二報告)

中 尾 正 三

I ま え が き

本稿は、昨年度（本校研究紀要第7集所載）にひきつづき倫理学習の模索とその実践の反省の報告である。本年は昨年度の実践の反省（Ⅱでふれる）にもとづいて、第2学年2学級に週2時間ずつの授業を4月から10月まで6ヶ月間行なった。

Ⅱ 昨年度の実践の概要と反省

本年度の実践についてのべる前に、まず昨年度の実践の概要とその反省をのべておきたい。何故なら、本年度の実践は昨年度のそれを基本的には踏襲し、その上でその修正や再検討を試みたものであるし、実践の対象は殆んど同じであるのだから。

I 出発点

A 生徒達の実態（事前調査）

a, 生徒には、やや消極的な自分の幸福を楽しむという傾向がある。

b, 教師と生徒の世代的なズレが案外認識されていない。例えば教師の良書推薦と生徒たちの愛読書はかなりくいちがっている。

c, 生徒たちは思想や思想家について、ヨーロッパについて最もよく知り、東洋・日本の順に知らないし、又それについての学習から何かが得られるであろうという期待も同じ順序にうすい。

B 学習上の困難点

a, 教師は知的合理的理解をさせることが最も困難と考えている。

b, 生徒は、対立する見解や変化しゆく歴史的流れの中でとまどい、統一あるものとしてとらえにくいということを困難としている。又抽象概念・哲学的用語が理解しにくい。

C 教科書の問題点（現行の各社のものを分析）

a, 東洋思想・日本思想のとり扱いがきわめて不十分である。量的に頁数もきわめて少ないが、その叙述の仕方、たとえば中国思想の場合孔子、孟子のみをもって儒教の代表となし、荀子をとりあげていない。老子、莊子についても不十分だし、日本にも民間

信仰の影響を与えている道教については殆んどふれていないし、その道教と老莊の思想との関係や差違については勿論ふれていない。又仏教の場合、釈迦の原始仏教を以て仏教の説明を終え、その後的大乗仏教・中国仏教・日本仏教への発展・変遷についての叙述はきわめて不十分である。古い時代のものとか封建的イデオロギーと規定するのみであったり、数千年の歴史の中で位置づけることのないとらえ方である。

b, 叙述があまりにも抽象的であり、「理想」が当然のものとしてのべられている。

c, 思想のとり扱いが（ヨーロッパ思想を含めて）歴史的背景を欠き、又生き生きとした人間的感動をも与えてくれない。

□ それに対する学習指導の方法（Iの実態にもとづいて）

A 身近かなものから

生徒の関心・日常生活から出発し、それとたえず結びついてゆく。話し合いや、調査とその結果の発表と文集の作成などをこころみる。

B 資料集

資料集を作る。前述の教科書の不備を補うために、東洋思想・西洋思想・人生論・青春論などの資料集をプリント版で作った。

C 意識化の為の手段

レポートを提出させることによって、漠然とは意識していても、明確に意識化していないそれぞれの考えを、理性化し分節化し（論理的思考）一抽象化させてゆく。一方、それによって教師も生徒の考えにふれられるようにする。

D 学習方式の比較研究

講義中心の学習形式とグループ研究発表討論形式と、二つの学習方法を二つの学級で並行して行ない、その結果を比較検討する。

E 生徒の受とり方を基底に

「生徒が教科書を読んでどのように感ずるか」から出発してゆく。

ハ 結果の概要（調査と反省から）

A 人生論から出発し、たえず生徒の問題や関心と結びつき、話し合いや文集を通して個人個人の考え

● の交流を計ることは、非常に効果的である。個人個人の悩みや問題が一般的なものであることを知ることによって、解放感や共感を得、また自分の問題を理性化してゆくことが可能となるようである。

B 思想史のとり扱いに際しては、

a, 単なる学説史としてでなく、日常生活から出発し又現実へたち帰ってくる思想としてとり扱いたい。

b, ヘレニズム思想は十分に配慮してとりあげたい。生徒たちはギリシアのポリス的世界の崩壊・普遍的な地中海世界成立という歴史的理由は知らず、まず感性的にエピクロスの静かな幸福の享受という思想にひかれる者が多い。これは前出の④Aaからも当然ともいえようが、この指導の仕方によって随分効果がちがうように思える。教科書ではこの部分はギリシア古典思想に比べると重点がおかれていないように思えるが、ここは十分時間をかけてくわしくやりたい。ここをくわしくやらないと、そのゆきづまりから原始キリスト教が発展してゆくという歴史過程も分らず、キリスト教に対する正確な理解もなしえなくなるのではないかと思う。

c, 現代思想—(ドイツ古典哲学の崩壊以後、マルクス・ニーチエ・キルケゴールなどから後の諸思想)—は、近代市民社会の現代への移行の中で位置づけられないと、ただ単なる抽象的思想となり易い。指導要領では別に独立して後で出てくる現代社会の文化・民主主義・現代社会の特質とも関連させてやると一体的に理解してゆくことができる。これは近代についても、例えばロック・ルソーなどは政治の単元でも出てくるし、スミス・ミル・マルクスなどは経済の単元で出てくる。これらは互いに関連させて考えるべきではないか。

d, 宗教的なもののとり扱い

昨年度の学習の中で最も意外だったし、逆にまた、最も重要であるとも思ったものは、83%もの生徒が何らかの形で宗教的なものを要求していることであった。他校での調査などでは宗教に否定的なものが多いという結果が出ているし、又日本人は非宗教的であるという断定すらよく聞かされるところである。しかしそれは後でも述べるように宗教=既成教団と考えた場合の宗教否定であって、決して本来の宗教的なものの否定を意味するのではないと思われる。とにかく昨年度はその事実を確認しただけでその指導については本年度にもちこされた。

● e, 小市民的日常的態度が一般的であるが、これを積極的な社会への連帯感や愛国心とどう位置づけていったらよいのか?最大の疑問点であった。

f, 講義学習とグループ学習との相違

グループ学習では、自分の問題を追求し、自分たちで整理するという点で良かったが、他方、自分の狭い領域に限定されてしまうきらいがあった。とくにエピクロスの取扱いで最終的にエピクロスへの共感を表明したものが、グループ学習のクラスで20名に対し講義学習1名であったことは印象的であった。それは後者の場合公平に知的な歴史的批判的説明と共に与えられる為、感性的にはひかれても無条件には受け入れにくくなるということがあるのではないかと考えられた。

C 限界と効果

a, 知的に認識し理解するということがそのまま態度を変えてゆくことには直接つながらない、ということを確認しておくことが大事である。

b, 限界を見定め、しかし又その効果をも認めてゆくこと。焦らずおしつけにならぬように、——その方がかえって効果を期待できるのではないか。

c, 社会科倫理の学習だけで道德教育は全部であるなどと考えないこと。全体の教育計画中で、とりわけロングタイム・保健の精神衛生の部分・国語の文学教材・読書指導・その他の教育活動と連関させ・位置づけることが大事である。

d, 社会の倫理学習の中では知的教材を媒介にして、それぞれの生徒の未分化な漠然としたものに刺戟や参考を与え明確に意識化させ、その中である程度の修正を与えてゆくことを期待できるのではなからうか?

e, 混乱させることの重要性、生徒たちが「わからなくなってしまふ」と嘆くことは、一面大事なことではないか。今までの無自覚な、無前提に当然としていたものが崩れ否定されて新しいものを模索すること(再統一への要求とその努力の過程)から新しい倫理思想の形成は始められてゆくのではなからうか。

f, しかし、「わからない」ままであるとき、わからないのはどこかに(むしろ生徒たちの側に)或る正当性があるのではないかと考えてみる教師の態度が必要なのではないか?

g, 倫理学習を効果的にすすめる為には、何でもいえる雰囲気が必要である。その為には、倫理について評価はしないという態度を明らかにしておいた方がよいのではなからうか?

h, 前述のような工夫をしながら指導をすすめることはたしかに効果もあるが、それと共に教師の負担も大きくなって、限られた時間と労働の中では一般化されることはできない。その為には、プリントはプリント屋に出すとか、印刷してみんなのものにする代

りにバズ法討議を充分活用するとかの工夫もあるが、何よりもよい教科書と生徒用の資料集が欲しい。

二 残された課題

以上のような実践と結果から昨年課題として特に意識されたのは、「現実的なものから出発し、実感を大事にしつつも、なお知識の系統性・客観性を重んずる」課題解決学習的ゆき方をどのようにするか、ということであった。とりわけ

- ① 抽象概念、固有名辞をどのように扱うか。
- ② 思想を政治的、経済的な客観的現実の中で、どのようにとらえるか。一とくに現代の倫理を考える場合—
- ③ 思想史の系譜的取扱いはどのようにしたらよいか
ということであった。

Ⅲ 本年度の実践

イ 基本的な方針と実践過程

A 教科書を従来のものから、とくに青年期の心理と思想の内容とに重点がおかれているものに変えてみた。

B 資料集を昨年度の（1「人生論・青春論」2「西欧思想」3「東洋思想」）の他に、更に、4「道徳をめぐって」（青年・世代・経済・政治・文学・実存思想などと人間の生き方について書かれたものを集めた）5「精神衛生」（倫理の教科書や保健の教科書よりもくわしく）6「宗教について」（宗教をただ単に否定したり印象批評したり逆に又単に礼讃するのではなく、科学的にとらえよとされている宗教学の立場からのもの、例えば岸本英夫氏らのもの、を集めて）を作成してみた。

C 西欧思想は、主として教科書を中心に講義学習で行なった。

東洋思想は、まず「どう考えているか」を話し合い、次いで資料集を読みその歴史的発展・変化の中に一貫しているものは何かを系譜的にまとめてレポートを出させ、最後に教師が批判的にまとめた。

宗教については、まず討論し、次に現在の宗教教団の現実をみ、マルキシズムからの批判を考慮に入れ、最後に資料集を読みレポートを提出し、更にそれをみんなに公開し話し合った。

日本の現代までの思想は、よい文献もなく資料集も不十分で（残念なことである!!）満足のゆくとり扱いはできなかった。

マルキシズムについては、ちょうど教生実習の機会であったので、学生運動が何故行なわれるのかなどからみ合わせて教生も参加してとりあげていったが、

資料集も不十分であり又教師自身も明確にしていないので、不満足なとり扱いしかできなかった。

D 方法としては、昨年ほど調査・プリント・話し合いの方法に重点をおくことはややひかえめにし、グループノートを作らせ各時間の感想や疑問を記録させて提出させ、又バズ・セッションを時々行ない講義・レポート・意見をかんたんに項目ごとに挙手してみんなに大勢を確認させる、などを中心に進めた。

E 高2では毎秋奈良・大和地方の見学旅行を行なうので、それと仏教の学習とからみ合わせ、個人的な事前研究・見学・印象レポート。教室での知的歴史的位置づけ、の順で関連づけてみた。

ロ 結果

A 生徒が共感した思想及び思想家

学習を終了しての生徒の調査で、最も共感し印象に残った思想及び思想家名と、逆に反撥を感じたものは、次の通りである。

（数字は実数・98名中）

思想及び思想家	共 感	反 感
ギリシヤ古典思想	8	5
ヘレニズム思想	12	8
（内 快楽主義	9	7）
禁欲主義	3	7）
キリスト教思想（現代まで含めて）	10	3
実存主義思想	6	0
経験主義、プログマチズム	9	2
大陸合理論、ドイツ観念論	12	1
（内 カント	9	0）
マルクス及びマルキシズム	5	7
フワイド	0	2
儒教	12	3
（内 孔子	1	2）
老花	6	0
道教（民間信仰としての）	0	1
仏教	5	0
その他	0	3

（なお上の数は、印象に残っているものを直接あげさせたものを整理して得た結果であつて、一覧表にして○×をつけさせたら、もつとちがう結果がでたのではないと思われる。）

B 東洋思想に対して

昨年度の部分（Ⅱ④Ac、Ⅱ④Ca）でものべたように生徒たちは東洋思想についてあまり関心をもたず知識も持っていない。我々の過去の伝統を形づくり現在も尚無意識の中に影響を与えているインド・中国の思想を正しくとらえ得ないことは、真のいみで過去をうけとめることにならないし、又それを正当に批判的にのりこえてゆくこともできないであろう。又それだけでなく、現代ヨーロッパやアメリカで東洋思想に対する評価が高まっているといわれるがそれが何故なのか、或いは更にその中には真実の部分があったのか、も考えることもできないであろう。

ともかく最初学習する前と終った時と、「東洋思想は古い過ぎたもの、封建的なものであり、もう不用のもの」と考えるかどうかについて調査した結果は次の通りであった。

	前	→	後
古くて不用	37	→	11
何かありそう	58	→	62
積極的意味あり	2	→	10

C 宗教に対して

学習の途中で、生徒が宗教に対してどのような経験をし、どのような考えをもっているかを調査したが、それは次のようなものであった。

a, 宗教的なものにふれた経験

	男(57)	女(41)	計(98)	実数
聖書を読んだ	19	17	36	
経典、仏教書を読んだ	6	8	14	
教会に何か求めて行つた	7	5	12	
お寺に	8	6	14	
神社に	6	3	9	
----- 整理してみると -----				
キリスト教への接触				48
仏教への				24

b, 宗派別にみた宗教への関心

神 道	3	3	6
仏 教	20	8	28
(内 浄土系)	4	3	7
(内 禅 宗)	13	4	17
キリスト教	16	19	35
(内 プロテスタント)	8	2	10
(内 カソリック)	5	10	15
そ の 他			
創 価 学 会	3	2	5

即ち、全体としてみると、キリスト教への関心度が a b を合計してみると83で最も高く、仏教は52、神道は15となる。これはどういうことを示すものであろうか？

なお、キリスト教への関心がとくに女子に高く、しかも女子にはカソリックの占める比重が高いというのは注意すべきであろう。

c, とくに仏教について

仏教は、現在既成教団の中ではとにかく公称信者数は最も多く、又葬式・法事などを通じて社会生活の中にとけこんでいるように見える。しかもお寺は老人のものとして化しているように見える。その為 仏教について、とくにその考えを分析してみた。「仏教はなお必要なのであろうか」という問いである。

(一人一答でなく、重なり合うものもある。)

迷信であり不要
葬式、法事などに必要
御利益があるから
世の中の秩序を保つため
文化財としての寺院として
個人の内面の支えとして必要

13	←	否 定
18		
0		
5		
28		
		51
		55

この結果をみると完全に否定しているものは少ないが、便宜的に或いは文化財として認めているものを合わせると半数以上にのぼる。更に注意せねばならぬのは、「個人の心の支えとして」必要としているもの55名の中31名までがとくに原始仏教と明記していることである。授業の際親鸞や道元についての取り扱いが不十分であった故かとも反省してみたが、やはり注目すべき傾向といえよう。

d, 宗教一般について

更にそれを字数一般に対する受けとり方と比較してみよう。(これは項目をあげて、◎と○とをそう思うだけ入れさせた為、数字は違うが、大体の傾向をみていただきたい。◎を2点、○を一点として計算した。)

宗教というものは、

迷信であり、アヘンである	16
葬式、法事などに必要	39
祈れば御利益がある	6
社会の秩序を保つため必要	29
個人の心の支えとして必要	123
宗教的愛が社会改革の原動力	34
	157

という結果である。これをみてみると、仏教に対しては呪術的魔力を期待していないのに、宗教一般についてはそれが少数ながら存在していること。心の支えとして仏教に対してよりも期待をしていること、更に社会改革の原動力として宗教的愛を期待しているのに仏教に対してはそれが皆無であること、などが注目される。

以上のことは、宗教や仏教の本質とは違うのかも知れない。しかし少なくとも、生徒が名古屋という都市の・本校の・という限定もあるが、そのように考えているという事実だけはたしかである。

とにかく私としては、昨年および本年と2年間の指導の中からひとつの重要な点に気づかされたのである。それは、生徒たち(17才の青年たち)が既成宗教に対してはそうではないとしても、何らかの形で宗教的関心をもっているということである。考えてみると、青年時代は不安と動揺の時期であるといわれ、社会的正義感や矛盾感も大きい。それは変革とか発展につながってゆくものでもあろうが、それだけが強調され、「青年時代の本質の一つは、それが宗教的なものだ」という亀井勝一郎氏のことば(これはどの本のど

こに書いてあるか自分でたしかめたわけではない。
生徒のレポートの中から借用したものである。）、又、
西欧の統計によると17才が宗教的関心のピークとされ
ているという事実、を見おとしてきたのではないかと
思う。既成教団の無力さや墮落、既成宗教に対する失
望感などから、「宗教的なもの」そのものまでを否定
することは誤りなのではなからうか？

そして、宗教に対する正しい取扱いは、現代の対立す
る二つの重要な思想である実存主義と社会主義に対
しても、又、近代以来現代までの特質である科学的技術
とそれを支える合理主義的知性に対しても、それらを
正しく位置づけてゆくことになるのではなからうか。

D マルクシズム・社会主義について

マルキシズムについては、生徒が関心をもっている
にもかかわらずその取扱いは十分ではなかった。

生徒の感想によると、

もう少しやりたかった	64
まあまああれでよい	17
とりあげなくてもよい	17

という結果である。又、マルキシズムに対する彼ら
の態度は

反対である	13
賛成である	8
無関心である	20
関心はあるがはっきり分らぬ	54
	33
	62

で、反対、無関心を含めると33名もいる点も注目して
よい（賛成8名に対して）。しかし関心はある者が半
数以上もいるのであるから、もう少し、賛否はともか
くとして、知的に理解できるよう、指導の仕方・資料
の使い方などを考える必要がある。本年度は教科書
と西欧思想資料集とで、他の思想と同じ程度にはやっ
たつもりであったが――。

なお、前記賛成・反対・その他・の理由は大体次の
ような現由からである。

（賛成）

- 貧しさをなくしたいため。
- 苦しみ、見捨てられている人たちを救ってあげね
ばならない。

（反対）

- 時代おくれである。
- 自由主義の方がよい。一党独裁には反対。思想・
個人の自由は守らねばならない。
- アカということばを思いだす。
- どうも頭の中にアメリカ対ソ連というカンネンが
こびりついているから。
- 僕は金もうけをしたいから、そうなったら困る。
- 理想の政府というものが不完全な人間の手によっ

て作られるはずがないから。

（無関心）

- 政治はつまらない。
- 今そういうものについての余裕がない。
- 現在関心をもつ必要がない。
- 考えたこともないし、考えようもしない。

（関心はあるが、分らない。）

- 高度でむづかしい。
- 一度もくわしく聞いたことがない。
- 良い本がない。
- どうも自分の生活と強く結びつかない。
- 実際そのようなことができるかどうか分らない。

E 資料集について

本年度使用した6つの資料集について、生徒がどれ
が最も役に立ったか調査してみた結果は次の通りであ
る。（最も役立ったもの◎2点、役立ったもの○1点
として合計した。）

人生論を集めたもの	86
道徳をめぐって	54
宗教について	45
東洋思想	23
精神衛生	15
西洋思想	10

次に、その他にもっと欲しい資料集としては④日本
の思想について、⑤現代の思想について、⑥単なる知
的理解でなく、もっと教訓的なもの、⑦学生時代の心
理的なことをもっと鋭く描写したもの、⑧個人の悩み
を生徒が聞き、それを答える形で資料集にしたもの
を、という要望があった。

F 倫理学習が役に立ったか？

学習を終了して、何をそこから得たか？生徒の感想
を眺めてみると、役に立ったと答えている者が62、役
に立たなかったというものが26、となっている。

次に、生徒の感想の中にいくらかを整理して考えて
みたい。（ここにあげられているものは全部がそう考
えたというわけではない。しかし、とにかくそう考
える者がいたということから、今後のあり方についての
示唆が与えられはしないか、と思う。）

a よかった点

① 身近な問題と安心感

- 自分の悩みにピシピシと来、同時にみんながそう
だと思って安心もした。
- 青年期のところは自分たちを当てはめてみるとピ
ッタリだから面白かった。
- 割合精神的に自由な時間であった。

② 人間に対する認識

- どのような人間がどのようなことを考えるかハッ
キリ分り、この世において自分がどのように生き

ていったらよいか分った。

- みんながどんなことを考えているか分って興味があつた。

④ 倫理思想への関心

- 今まで無関心であつた倫理について分った。自分のワクをこえて他の人の考えも分り、又ヒントも得られた。
- 倫理宗教をバカらしいと思つてバカにしていたが、少しでも関心をもつことができるようになった。
- おぼろげながら、こういうことを研究したら有意義な人生が送られるのではないかという刺激を与えられたような気がする。
- 日常生活を平凡にすごすのではなく、その生活を正しくみつめる——その断片に少しでもふれただけでもよかったと思う。
- 思想がいかに重要な意味をもっているかが分った。
- 機会がなければ一生考えることのできない思想や人の心のことなどを学べた。

④ 思想史への理解

- 東洋の思想についてくわしくやったこと。
- 仏教が本来のものどちがっていることを知ったこと。
- 思想の全体の流れをとらえられた。
- 仏教のおこつた過程を学び、非常に面白かつた。
- 宗教に対しての考え方を新しくした。
- 宗教—今まであつたものを考えるのではなく、現代と宗教ということについて、現代の宗教のあり方、又それら宗教の果している役割ということを考えてたことはとても自分にとって有意義であつた。

⑤ 論理的な幅広い思考

- ものごとを理理的に考えるようになった。
- 自分として進む道を幅広く見解できたこと、考え方が単純でなくなつたこと。

⑥ 自分の確認、自分の思想の把握

- 学習する以前には、ハッキリした自分自身の思想というものがなかつたが、今まで習つた人々の思想により、自分自身の思想がハッキリとしてきた。
- 今まで考えていたことよりも深い所を追求したり又自分の誤つた見方をしてた事が分つて、見方を変えたり違つた方向から考えたりしたこと。
- 自分の思想を改めて考えるようになり、何となく人間としての意義を感じるようになった。
- 自分たちの気持が今まででもやもやとしていて自分

自身でも分らなかつたが、自分は今こう思つているのだな、ということが分るような思がする。

- 以前の私の思想のようなものが、より自分のものになつたような気がする。自分というものを見つめるよい機会だつたと思う。
- 何か自分の心に自分の考えをはっきりさせてくれた。

⑥ 先人との一体感、思想史を自分のものとして感じる——（人間性や思想の高度の理解といえるのではないか—筆者—）

- 我々の心の中で時々ふつと思ふことを、思想家がそれについて徹底的に追求して自分の思想にしたということが分つた。そして、我々の心の中にはそれぞれ全部の思想が入りこんでいて、時には快樂主義となつて楽しみ、又時には禁欲主義者となつて節約する。そういうことすべてが昔の人も感じていたということが分つた。
- 今まで知らなかつた昔の人の思想が、今私たちの感じていることと同じであるという点に感銘した。
- 色々な人たちが、その時代に應じた考え方をして現在に到つているということがよく分つた。

b. 物足りなかつた点

① 身近かなものをもつと——

- 身近かなものがない。学生時代の悩みや現代の青少年のあり方など具体的なものが欲しい。
- 分りにくく、関心をそそられるものが少ない。
- 自分たちの生活とくらべて、あまりに身近かに感ずることができなかつた。
- 少しむづかしいように見え、内容に興味がもてなかつた。
- もっと興味のあるものが欲しい。

② 現代にもつとふれて……

- 現在の社会情勢に合わせてやってもらいたかつた。
- マルクシズムや社会主義にもつとふれてもらいたかつた。
- 現実の問題が欲しい。
- 政治には関心があるが倫理にはないし、やけにむづかしかつた。
- 昔のことではなく、現在のことに重点をおいてやってもらいたい。

⑥ 現在生きている我々の思想を——

① 日本の思想を——

- 外国中心すぎる。もっと日本についてやってもらいたかつた。
- 現在の日本の思想をうんとやりたかつた。

④ もっと深く追求したい——

- 関心を生み出すだけでなく、一歩進めて共感をおぼえた思想をもっと深く追求できるようにしてほしい。
- あまり表面を軽く流れすぎた。そんなに多くの思想でなくて2つか3つぐらいにしばらく深く考えたかった。
- 表面だけでなくもっと奥の方を知りたかった。
- 大ざっぱな流れは全ったが、細かな1人1人の思想家の考えを知ることができなかった。

⑤ もっと教訓的なものを——

- 思想史的なものでなく、もっと教訓になりハゲマシになってくれるものがほしい。
- 青年期とは何々であるということではなく、こういう場合にはこういう気持ちになることが大切だというような具体的な解答がほしかった。

⑥ もっと話し合いなどを——

- グループノートをもっと授業の中で生かして、いろいろ話し合ってみたかった。
- いろいろな話し合いでもっと自分の考えをねり直したい、と思った。
- もっと質問する機会を作ってもらいたかった。
- みんなの意見をどんどん出せるような雰囲気欲しかった。

⑦ もっと時間をかけたい——

- もう少し長い時間をかけて、みっちりと自分の心の奥にひそんでいる考えをひっぱりだしたかった。
- 1年の後半でいいから、倫理の時間を作って、後輩の人たちにもみっちりと考えさせてあげたい。中学の時には倫理の時間がないが、あってもよいと思う。中学で卒業していく人もあるのであるから。

⑧ 倫理はもっと少なく。

- 実社会とは全然ちがうし、大学の入試にもあまり役に立たないのであるから、倫理などに時間をかけるのはもったいない。
- 倫理はもう少し時間を少なくして、政治や経済に時間をかけてもらいたい。

⑨ 資料集について——（前にのべた（Ⅲ④D）ものの他に——）

- 資料集はむつかしすぎる。もう少し分りやすくして気軽に読めるものを。
- これまでの主だった思想家の言葉などをのせた資料集が欲しい。

ハ 反 省

以上、本年度の基本方針とそれに基づいての実践と

その結果をのべてきた。生徒の側からみた感想とくに「物足りなかった点」は教師としても反省すべき点が多く、それについては本年度の実践過程（Ⅲ④C・D）のところでも少しふれた。もう一度まとめてみると、

- A 資料集も、そのとり扱いも、日本の思想と、現代、とくにマルキシズムについて不十分であった。
 - B 青年の現実の問題をもっととりあげてゆくべきであった。
 - C 単なる知的説明でなく、もっと心情にくい入る教訓やハゲマシになるようなものが必要ではなかったか。
 - D 単なる広い歴史の流れだけでなく、少数の思想家をとりあげて、深く追求してゆくとよかった。
- Dはそのとり扱い方如何では、Cにも役立つであろうし、資料集のところで「思想家の言葉なそをのせたもの」の要望があったことも結びついてゆくだらうと思われる。時間に制約されて仲々困難ではあろうが、何とかしてやってゆきたいものである。
- E もっと話し合いを積極的に行なってゆくべきではなかったか。

しかし、私が昨年度とくらべて今年度、話し合いを積極的にとりあげなかった（全然やらなかったわけではない）のは、ひとつには去年の高2とくらべて本年度の高2が積極的な雰囲気欠けるようにみえたという点もあるが、それ以上に、生徒の話し合いが、発言者が少数のものに限定されがちで、又いつも堂々めぐりをして発展がみられない、という点もあった。そこで、Ⅲ④Cにのべたような教師の客観的なとり扱いを中心として、生徒の主体的な問題意識や模索やそれと結びつくような形に重点をおいてとりあげていった。それは、昨年度のグループ学習についての反省（Ⅱ④B f）にも基づいている。それで、話し合いに代るものとしてグループノートを取りあげてみた（Ⅲ④D）のであるが、その評判はあまりよくなかった。（グループノートが役に立ったとする者19.ふつう30.役に立たなかった46。）それで、来年度はグループノートのやり方の工夫をしなければならないと思うが、やはり話し合いを積極的にとりあげてゆかねばならないと思う。

なお生徒に、先にのべた「ただ単なる話し合いでは、堂々めぐりをして発展がない」という考えについて意見を聞いてみた。少数の者はそれに同感であったが、多くはそれに反対であった。その理由を少しながめてみよう。

- 堂々めぐりでもよい。そのうちに必ず進歩が生れる。
 - 堂々めぐりをしている、自分自身の考えをより深く考えることにより前進がある。別に前進とか緒論をはっきり出さなくてもいいと思う。話し合いすることに意味があるから。
 - 堂々めぐりの中から何か人の意見に対する自分の考え方が出てくるからそれでよい。
 - 口では出さなくても、そうかなあと思うことがあるから。
 - 自分でもそういうことがあるか、と反省できるから。
 - 人の意見もいつかは思いだして役立つことがある。
 - 話し合いの中から色々なことが分ったような気がする。
 - やはり自分の考えと人の考えとどこがちがうかということを知りたいし、必要だと思う。
 - 自分の意見だけに固まった人にとって広く物事を判断するのに参考となる点が多いから、前進がないとはいえない。
 - 話し合いをすれば、全員がその問題を意識しなければならないし、又意見がいろいろ出るので自分の考えと比較できるから。
 - われわれのクラスではそういう堂々めぐりさえもない状態である。話し合えば何らかの形で前進がある。
 - ◎いつも話し合いばかりしているだけでは前進がないと思うが、やはり必要である。
- 大体以上のようなものである。最後の◎の意見が又、私にとっても結論のような気がする。結局知的理解と対話交流とが正当に位置づけられればよいのではないかと、と思われる。

二 倫理の学習を意識的にいろいろ工夫し始めたのは昨年からである。

1 昨年はやりにくくて困るなと思いながら、その時その時の思いつきでやっていたが、その1年間は教師としての私にも不満であった。それで少しでも満足のゆく方法を探究したいと思ったことと、39年度から政経と分離され独立する倫理社会を正しい姿勢でうけとめてゆきたいと思ったことがこの実践研究の出発点であった。2年間の研究的実践をふりかえって、その出発点で問題としていたことがどの程度解決されたか、検討しておきたいと思う。1 昨年社会科倫理を学習した生徒達に感想を書いてもらったところ、いい点は殆んど出ず、困ったことばかりが多く出された。彼らが

あげていた問題は大別して3つの領域にわけられる。

(その1)

- ただ単に教科書をやるというだけでは、漠然としているだけで頭に残らない。
 - 教科書中心ではなくて他からも勉強したい。
 - 我々の身近かな問題をできるだけたくさん、授業の時にとり扱って欲しい。資料をたくさんみせて欲しい。
 - 自分の生活とまるでかけはなれたことをやっているような気がして、気のりがしない。
- なるべく生徒を例にとって話をしていただきたい。悩みなどの資料をとり、その解答を授業中に教えて欲しい。教科書のための勉強でなくて他の本にのっている内容をくわしく教えて欲しい。レポートで勉強するのもよいと思うが。
- 高2ともなれば、誰でもいろんな人生問題や悩みがあるはず。だから倫理の時間にそのようなことを無記名で書かせて、その問題を話し合ったら親しみもわくし為になると思う。話し合いだと女子は意見をいわないから紙に書かせるとよい。
 - 経済や社会とちがって実感として感じないので、理論だけ分ってもつまらない。又面白味もなく、いやである。

(その2)

- 沢山の哲学者があとからあとから出て来て名前と思想とがおぼえにくく、同じ人の思想が始めと終りで違ってくることもあるから一。
- ある人の思想が他人に受けつがれていく時の系統が分らないから、その人についての大きな思想と、系統をあらわす表をやってからくわしく入ってゆくとよい。
- 歴史的なつながりを分りやすく説明してほしい。
- 思想史がとりとめもないように感じる。その人その人の主張する思想が僅か数行で説明されているので。
- 抽象的でいろんな学者の学説などみんなよく似ているのでだれが何をいっていたのか混乱してしまう。
- 思想がどのように変化し又それがどううけつがれていったのかをまとめて聞いても、その人たちの考えが殆んど変わらないように思えたり、資料(市販)をみてもそれが何をいっているのか全然分らない時がある。
- それに対する知識があまりなく、そのような思想がなぜ出てきたのか理解できない。

- その人物と思想と年代とその当時の社会状態が結びつきにくい。

(その3)

- 現在の社会状態などを考え、これから自分たちの進むべき方向や人生観などを知りたい。
- 実際に読書をし(家庭学習にしてもよい)それについて討論をしたい。
- 現実に関心している問題や悩みが実際に解決できるような仕方が教えてもらいたい。
- 悩みの解決の具体的な糸口を知りたい。
- 知識や口先だけの勉強でなくて、できるなら実際に私たちの生活態度が変わってくるような身についた学習であってほしい。

大体以上の3つの領域のような要求や不満が出されたのであるが、それと前にあげたⅢ④Fでのべたa「役に立った、よかった」b「不満だった、物足りなかった点」とをくらべてみると、(その1)(その2)については、ある程度解決の見とおしもついたように思われる。(その3)についてはまだまだ不十分な点が多い。

元来生徒達にとっては、知性化された抽象的理論や思想史より、もっと身近な勉強・交友・異性・性格・家庭などでの問題が切実であり、そのことは資料集で最も評判のよかったのが(人生論、青春論)であったことからもうかがうことができる。昨年度は生徒の文を集めて「文集」を作ったのだが、今年はそれをホームルームのロングタイムの活動の中でやってゆくようにした。そういう問題を感性的な形でとらえようとしているものに、NHKの学校放送番組「青年期の探究」があるが1年間を通じて1週1遍という放送ではいろいろ困難がある。読書・討論にしてもそうである。どうしてもそのような問題は、ロングタイムのホームルーム活動や、同好の士のクラブやサークルでの活動に期待する他はないと思う。全面的な教育計画の必要性を改めて強く感じさせられるのである。

Ⅲ 残された問題

以上、昨年度の実践をうけて今年度実践した過程とその結果を検討し、更に1昨年度の問題点とを比較考察してきたが最後に私見をまじえて残された問題を考えてみたい。

イ 評価の有無と学習意欲ならびに効果

昨年、本年と「倫理の学習においては評価はしない」という方針を、学習の初めにみんなに告げて学習を進めてきた。その結果を考えてみると、たしかに何でも自由に考え表現するという利点はあったように思われ

る。しかし、反面「どんなことを考えてもよいのだ」「どういう思想も許されるのだ」という考え方をうみだしはしなかったかと思う。更に「おぼえなくてもよい、聞いていなくてもよい、教科書も読まなくてもよい——」というような態度の者も現われて来て、多くはまじめに考え話し合いに参加しているのに、利己的な態度をとったり積極的に学習しない者もあったように思う。ある程度の強制がないと、ついだらけてしまうのは我々にもありがちである。このこと自体、倫理の基本的問題であって「自由と規律」の学習のよい教材にもなり得たのであるが、その態度が倫理学習を終えて政治経済の単元に入って知的理解や記憶のテストをやった時まで延長されて、今までの学年にない悪い成績となって現われて来た。これはやはり考えねばならぬことのように思える。印象に残り共感をおぼえた思想家の名前だけ記憶しておけばよいのであるか。それとも、人類の尊い思索と実践の文化遺産として重要な思想家や思想の流れは強制的に記憶させるべきものなのか。それは昨年度においても残された問題として「抽象概念・固有名辞・思想の系譜などの客観的知識をどうするか」をあげておいたのと同じ問題でもある。

評価を伴うテストにての考えを調査したところ、(やった方がよい—35)(ない方がよい—60)(分らない—13)であった。(ない方がよい)という理由は、「成績にこだわらずに自由に考えてゆくことができる」「思想や考え方を評価できるはずがない」というのが多く、「その方が楽だ」というのが少数ながらあった。(やった方がよい)というのは、「でない熱心に勉強しようとしな」「基礎的な常識としてそれぐらいのことは知っていないと困る」「大学の入試の時困る」というようなものであった。

私は、記憶するようなものでなくて、課題＝論文形式とか、系譜をまとめたり、問題点をさぐったり、変化の中で一貫したものを考えさせたりするようなレポートやテストはしてきたのである。しかし、それについては、A・B・Cのかんたんな評価を与えとか、その結果をみんなに話し合い考える材料にするとかして、通信簿には評価はしなかったのである。

自主的思考・自由な雰囲気を持しながら、責任をもち・積極的に学習してゆくようにしていくためにどうしたらよいのか、今後更に考えてゆきたいと思う。

ロ 気になるいくつかの生徒の考え方

a 主体的態度の喪失

生徒のレポートの中に、「青年をみればその社会が分る」ということばにふれて、「大変いいことばだ。青年は敏感であり矛盾を意識しやすい。だから、社会

がおかしいと青年もその影響をうけておかしくなりやすい。だから、青年をみればその社会がどうであるかよく分る。」というようなものがあった。それをみんなでとりあげて考えたところ、半数以上がそのような考えに同感し、「青年が未来の社会をつくってゆくのだ。だから、その国の青年をみれば次代の社会が推測できるのだ。」という積極的な建設の主体として把握しようとする者は少なかった。こうした主体性の喪失は問題ではないか。

たしかに戦後、社会科の学習を中心とした新教育や民主主義、マルキシズムの社会的潮流の中で、社会の中の問題点を指摘しその変革を要求するといった考え方が果たした役割は大きい。しかし一方、それはただ他の側に責任を帰し、原因がそうであるからその結果も当然である、という風潮を助長しなかったであろうか。又、青年心理を学習して、「青年期には不安定な感情があり、ある環境の歪みは性格の歪みをうむ」という説明を自己弁護に転化して、そういう状況の上にあぐらをかいて居直る、という傾向もみられる。「反抗期なのだからこういうことも当然でしょう」などという者も出てくる。

外的条件や心理的条件の分析指摘はたしかに必要なし、そうした客観的の把握がなければ、誤った主観的・観念論的解決や神がかり的になってしまいやすい。が、そうした状況を自分たちの責任において引き受け、それを克服し建設してゆこうとする自己の主体的な態度、これこそが倫理・道德教育の根本の問題なのではあるまいか。

B 「マルキシズムはもう古い」

教生実習の時に、教生がマルキシズムを含む社会主義思想のところをたまたまとり扱った。ところが、その時比較的優秀な生徒が「マルキシズムはもう時代おくれだ。そんな古くさいものを何故とりあげるのか」と質問した。単に困らせようという気持からではなかったようである。そこで、「どうして、もう時代おくれになったのか？」と質問してみたところ、「そういう風にいわれているのではないか、第一私はああいうものはきらいである」と答えた。

案外、こういう態度が多いのではないか。どうしてそうなのか検討もせず、「ただそうだからそうだ」「みんながそう考えているから」という理由でそう考えてしまうような——。これは逆に「マルキシズムが絶対正しい。」と考えている場合にもありうることである。こういう態度をうちこわしてゆくことが必要なのではないか？

C 小市民的思考—享楽と教養

静かな片すみの幸福、エピクロス風の静安、老荘風

の消根的（老荘がほんとにそうであるか問題であるが、そううけとっている）個人的生き方にひかれるのが多くの生徒にみられる。これは昨年も問題として残されてきたのであるが、今年度或る生徒のレポートに次のようなものがあった。

「明治以来の学生生活の遍歴で、僕が憧れた時代は明治末期～大正初期である。天下国家を論ずる書生時代はどうも偽善的でいかん。それにくらべ、この時代は人間の知的教養を重視しているからよい。」

これを書いた生徒は、日常的小市民の生活を楽しもうとしている大多数にむしろ反撥を感じよく本も読んでいるのであるが、この傾向は考えさせられるものをふくんでいるように思われる。戦後、「知的教養のみの人生派とか白樺派的なものをのりこえてゆこう」という意見が強く出されたのはまだ記憶に新しい。終戦直後の混乱期から変革期を経て、「太陽の季節」「美的享楽派」が出てきた安定期の経済発展の中で、生活派でもなく、変革派でもない教養派的な者も出て来ている。そうした認識の下に青年たちと取り組んでゆかねば、彼らの心にふれるような指導は出来ないのではないか。

こういう小市民的生活派や享楽派更に教養派的な考え方の共通の特長は、社会や国家から自分を切断し社会的なものをむしろ拒否したりする傾向がみられることである。このことと先にふれた宗教的関心とはどこかでつながるものもあるのではないかと思う。しかし、これをどう指導していったらよいか。これを、先の反省でものべたマルキシズムに対する生徒たちの考えとからみあわせて、どのように指導していったらよいか来年度の大きな課題であると思う。

④ 実践倫理—「知行合一」の問題

最後にもうひとつ私にとって大きな問題と思われるものは、知的理解と道德的实践の関係である。先の反省の所で、生徒たちも「ハゲマシとか教訓的な」という表現でそれにふれていたように思うが、単なる知的理解ではなくもっと全人間的道德性への要求があるのではないか？「知っていても行えない」「心はそれを欲するが、行いはそれをたえず裏切る」ということは、日常我々もよく経験していることである。仏教（原始仏教でとくに）の指摘している慧と戒・定の問題である。カントの純粹理性批判と実践理性批判・判断力批判との関係もそうであろう。恐らく生徒たちが宗教への関心をもっているものが多いということも、究極にはこういう問題ともつながってくるのではないかと思う。

「行」ということばでそれを呼ぶと、戦争中の「行の教育」を想起して抵抗をおぼえる人もいるかも知れな

いが「知行一致」は陽明学でもソクラテスでも又ヨーロッパの伝統の中でも問題とされてきたところである。倫理が単なる認識論でなく実践を前提としている限り、この問題を無視することはできないであろう。これをどう解決してゆくか、それは国民を強調する立場からでも、社会的変革をめざす立場からでも、又個人の幸福をめざす立場からでも、同様に「実践倫理の問題として重要な課題であろう。実践倫理はきびしい鍛錬を必要とするものではなからうか。人が社会の中で生きているという事実が倫理を生み出すものであり、それはより高次のもののために低次の自由を抑制することを要求する。自己抑制とか鍛錬というものは戦後とくに毛ぎらいされる風潮があり、教師もそれを口にすることをためらう傾向が強い。しかし社会主義の立場からいわれる「大衆への服務」にしても、「鍛えておく」「私欲の抑制」を要求するのではなからうか。スポーツマンのきびしい鍛錬も、学習のたゆまない継続も、又、エピクロス風の享楽主義で永続的幸福のために刹那的快楽を断念しコントロールすることの必要を指摘するのも、そういうことではないか。

③ 「究極のもの」

しかし、果して何のために自己の欲望を抑制し、何を実現するために自己鍛錬を要求するのか、それがその次に問題となるであろう。シュバイツァーは「生への畏敬」を説き、キリスト教では「神」を、ある人は「民族や国家」を、又ある人は「個人の日常的幸福」を、或いは又、「歴史的必然」や「階級的連帯」のために、それを主張する。由来、倫理思想の根本問題は常にそれから出発し又そこに立ちかえってゆくものである。

④で鍛錬の必要性を指摘したが、しかし鍛錬や抑制が方法としてでなく自己目的化する時、それは2千数百年前、釈迦が否定した「苦行主義」となる。

しかし「の為に」というその目的対象としての価値が問題となる時、その価値をめぐる対立がしのびこんでくる。数年来道徳教育の問題がやかましくとりあげられ衝突をひきおこして来たのも、又、現場で教師が倫理の学習指導にタメライや抵抗をおぼえて仲々本気でとりくめないのも、生徒が学習の過程で真剣になればなるほどかえって混乱してしまうのも、社会の内部での対立が価値観の対立として思想の中にもちこまれて来、個人をも分裂させてしまうこともあるからである。

その対立の侵入を拒否してクレイゴトですませてゆくのでは、意味のないただ単なる記憶つめこみになってしまうだけである。かといって、或る1つの特殊な立場を絶対化しすべてをそれから割り切ってゆくのは、

未熟な基礎的知識もなくしかも情緒的影響を受けやすい青年達に教育の場でおしつけてゆくことになってしまうであろう。Ⅲ④Bで指摘したような傾向が強い彼らには、たとえどのような思想であれそれだけを無条件に、「絶対正しいもの」としてうけとらせてゆくのは戒められるべきであると思う。

私としては、現在次のようなヤスパースのことばに倫理教育の立場として共感をおぼえている。すなわち「偉大な様式や体系的な連関をもつ哲学は2500年来西洋やシナや印度に存在する。一大伝統がわたくしどもに話しかける。哲学の多様さ・矛盾・相互に排斥しあう真理主義、これらは根柢において或る1なるものが働いていることを否むわけにはゆかぬ。ただなんびともこの1なるものを所有することなく、あらゆる真剣な努力がその周囲をつねに回転しているだけのことである」と。

そのような人類の今までの文化遺産の中から、「古人の跡を求めず、古人の求めたところを求める」という芭蕉の態度で同じく彼のいう「不易」のものが「流行」（歴史的現実）の中で我々に課題としてその解決を要求しているものに直面して、新しい現実の中での新しい倫理を創造してゆくこと——客観的な社会への分析と自己の内面の把握、それらを主体的に支配し変革し真に人間の幸福を実現してゆけるような社会と文化をつくりあげてゆく——そういう方向をめざしてゆくべきではなからうか。

V 終りに

Ⅰ 来年度の方針

以上考察してきた点にもとづいて、来年度は次のような方針で実践研究してみたいと思っている。

- A 教科書を、（来年度までで現在のものはなくなるが）もう少し社会思想的観点の強いものをえらんでみる。（高2）
- B 日本の思想史の資料集を考えてみたい。
- C 現代の思想のとり扱いを工夫したい。
- D 何人かの代表的な思想家を深く追求し、感動や教訓、ハゲマシがえられるような方法を工夫したい。
- E テスト・評価を工夫したい。
- F 話し合いをもう少し積極的にとりあげ、グループノートの利用を工夫したい。
- G 39年度より実施の倫理学習を高2（2時間）を高1（1時間、青年の心理や人生論を中心に）高2（1時間、思想史・社会・文化を中心に）として試みてみたい。そのため来年度の

高1に実験的に高2とは別に新しいやり方を試みる。教科書がないので困るが、資料集や新検定の教科書を参考にしてやってゆくつもりである。

□ お 願 い

以上、過去2年間の実践と反省、それに最後にはいささか私見にかたよるかも知れないが私としては問題と考えることをのべてきた。

私がとりあげたこと、実践してきたことはきわめて局限され、又誤謬もあろうかと思う。本稿を読まれた方々の御批判や経験の交流をお願いして終りとしたい。

(注)

1. 本校の生徒構成は抽選入学を原則とし、種々雑多な者を含むので、ほぼ現在の普通科高校生のすべてを代表するものと思ってよい。決して優秀な者のみではない。
2. 資料集は、主として世界文化史体系、新倫理講座、教養文庫、その他単行本から選び、各20頁～40頁位で、実費20円～50円位である。今後整理統合して、なるべく低廉でおさえたい。生徒の要求度の少ないものは廃する予定である。